

岐阜プラスチック工業

「非食品」で大型事業育成



大松利幸社長

冷凍・チルド食品の高品質を維持するのに欠かせないのが食品容器だ。連結売上高853億円（2016年度）を計上し1000億円企業も視野に入れる樹脂成形大手の岐阜プラスチック工業は、その食品容器ビジネスを収益の柱に据えて幅広い新規事業に積極果敢に挑戦する中部地区の有

力企業である。

子会社のリスパックを拠点に展開する食品容器事業は白磁器そっくりの外観を樹脂で再現した高意匠仕様の食品容器「Pure White」（ピュアホワイト）（商品名が惣菜市場で評価されるなどし今期は念願の年500億円を突破する見通しだ。

こうした増販を追い風に食品容器の新工場建設プランも浮上しているが、大松利幸社長は「食品容器以外にも目を向けて欲しい。第2、第3の大型ビジネスへの育成を

見据えた複数の非食品関連事業が始動している」と強調する。

その筆頭が岡山県の水島港玉島地区での新工場建設。敷地は約5万平方メートル、工費は73億円の大型投資案件だ。大松社長は「物流パレットや良品計画向け日用品、雨水貯留槽の専用製造拠点として整備し、この投資を起爆剤にさらなる増収を目指す」と意気込んでおり、19年3月の稼働が待ち遠しい。

そして樹脂の高強度と超軽量の両立を実現したハニカム（蜂の巣）構造

の次世代成形材「TECC CELL（テックセル）」（商品名）の動向も見逃せない。「大きな目標とする自動車分野でも使われ始めた。テックセルから誕生した防音材の『セイント』も好評だ（大松社長）。テックセルは高専ロボコン全国大会に出場した大分高専が採用し社会の認知度も上がっている。新技術による経営革新」を旗印にプラ成形の新たな地平を切り拓く岐阜プラはどこに向かうのか。来期の経営戦略は必見だ。